

「日の出の森・支える会」は、東京都西多摩郡日の出町にある巨大な処分場が引き起こした環境汚染から、自分たちの生命・健康を守るとともに、ごみ問題の真の解決を願って立ち上がった地元住民運動を支援することを目的として、1994年に発足しました。

ニューヨークの生ごみ処理の現在

日の出の森・支える会 大沢 豊

4年前の2017年12月のニュースにニューヨーク市での生ごみ処理が始まったことを書きました。今回はその後の事情を探ってお知らせします。

前回の記事は、2013年まではごみを分別せずに、また大気汚染を防ぐために焼却をせずに近隣の複数の州にトラックで高速道路を使って運搬し埋め立てていました。同市は生ごみを毎年120万トン埋め立てているということでした。全世帯の5%相当の15万世帯と100棟の高層住宅、600校以上の学校から始めて、2016年から全市に拡大していくという計画を報告として書いていました。

ニューヨークの環境関係の新聞記事によると、2016年に同市は食料廃棄物再生企業6社と契約をしていて、4社が堆肥化、1社が下水処理場へ行って粉碎されて嫌気性微生物による処理、残りの1社が嫌気性消化装置での処理をして「肥料」と「バイオガス」という収入源を作り出しています。

生ごみ収集は市の契約した事業者が行う大型施設での処理と、市民が行う小規模の処理があるようです。その小規模処理とはコンポスト収集プログラムで、2013年に導入され、現在350万人が参加しているそうです（NY市は840万人）。市内に170カ所の「歩道上の生ごみ回収場所」があって、こうした生ごみの回収拠点は行政の援助を受けたり地域の寄付をベースとして活動している非営利団体が運営しています。また、地域の環境問題に関心を持つ図書館などが回収拠点となってい

ます。（アメリカではユニークな取り組みを行う図書館があり、貧困問題に関心のあるところではホームレスの支援活動も行っています）

地域で回収された生ごみは地域で堆肥化処理され、コミュニティーガーデン、公園、街路樹に活用されたり、地域のコミュニティーメンバーで共有されています。

しかし、エコ活動に関心ない人たちがたくさんいることも現実です。貧富の格差が一番



大きいと言われているニューヨークでは、貧困層の住民がエコ活動に協力的でない傾向があるとされ、ニューヨーク市はその解決のために教育の改善、向上を最優先課題としているようです。

ニューヨーク市は2030年までにゼロウェイスト化するとして、全世帯に生ごみ回収を義務付けようとしていましたが、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う予算の再編成でデブラシオ市長と衛生省（DSNY）は2020年5月から1年間そのサービスがすべて停止すると発表しました。しかし、その後10月にはサービスが再開されるとしています。

（新聞記事や個人のブログなどを参照）